

---

 新刊紹介
 

---

Ohno, M. and Critchley, A. T. ed.: *Seaweed Cultivation and Marine Ranching*. 1st ed. 151pp. 1993. Kanagawa International Fisheries Training Center, Japan International Cooperation Agency (JICA)

価格 ソフトカバー 2,000円, US\$ 20  
ハードカバー 2,500円, US\$ 25

大宝律令(701)の昔より、海藻を貢物として朝廷に捧げるなど、日本人は古くから海藻を利用してきた。そのこともあって、我が国における海藻利用の研究は盛んで、ノリ、ワカメをはじめとする海藻栽培技術は極めて優れたものがある。その理論と実際については、既に数多くの論文や解説書があり、また最近三浦昭雄博士編(1992)食用藻類の栽培(150ページ)(恒星社厚生閣)が出版され、我々にとってその全貌を知ることとはさほど困難でなくなった。最近、健康食品、生理活性物質の探索の対象、マリンバイオマス利用資源等、海藻に格別の注目を払う人達が我が国以外にも多くなってきた。しかし、残念なことに、我が国の海藻栽培についての解説の多くは日本語で、全般について英文で書かれた本がなかったため、我が国の優れた技術を外国の人々が知るのには難しいことであった。英文で書かれた本書は、本来、海藻生産と利用の理論と実際を修得するために来日する開発途上国の人達の Training Course 用に、Japanese International Cooperation Agency (JICA) が援助して作られた教科書で、日本の海藻栽培技術を中心に、フィリピンのカラゲナン原藻、チリ、イスラエル、その他幾つかの国のオゴノ

リ類栽培などが解説される。11章から成り、扱われる海藻と執筆者名は次のようである(敬称略)。緑藻ヒトエグサとアオノリ(大野正夫)、クビレズタ(G. C. Tronoと当間武)、褐藻コンブ(川嶋昭二)、ワカメ(大野と松岡正義)、オキナワモズク(当間)、紅藻アサクサノリ類(大房剛)キリンサイ類と *Kappaphycus* (Trono)、オゴノリ類(A. T. Critchley)であり、他に1章海藻資源(Critchley)、10章海藻礁の造成(D. B. Largoと大野)、11章海藻とその海洋牧場への役割(M. D. Fortes)が採録される。第1章の記述によると、海藻の主な利用は1、食品 2、アルギン酸 3、カラゲナン 4、寒天であり、現在海藻栽培が盛んに行われている国は、ノリー日本、韓国、中国；コンブ—中国、韓国；ワカメ—日本、韓国；ヒジキ—韓国；カラゲナン原藻キリンサイ類—フィリピン、インドネシア、タンザニア；寒天原藻オゴノリ類—チリであるという。なお本書の執筆者9名のうち4名は日本以外の国の研究者(フィリピン3名、南アフリカ1名)である。日本以外の国の人々が海藻利用に積極的な関心を寄せていることが窺えるが、本書を読み、挙げられた文献に目を通すとき、その認識はさらに高まる。本書は時宜を得た出版物であり、編者の大野正夫教授と A. T. Critchley 博士の労を多としたい。なお購入希望者は高知大学海洋生物教育研究センター大野正夫氏(781-11 高知県土佐市宇佐町井尻194)に直接申し込むこと。

(日本赤十字看護大学 千原光雄)

西澤一俊著：海藻と成人病予防  
183頁、1993。研成社 1,300円

元本会会長の著者は、よく知られるように、セルラーゼの生化学や藻類の生化学の分野で多くの業績を挙げている学者である。最近では藻類のもつ成分の様々な生化学的特性と人体の生理や代謝との関係に関心をもち、医薬、薬学及び栄養学などの観点からその方面の文献を調査し、成果を学会に総説や論文として発表し、また解説を企業向けの雑誌等に寄せておられる。著者は先に同じ出版社から「海藻の本—食の源をさぐる—」(1988)を刊行したが、今回の本は海藻成分の薬理面あるいは

栄養面の効能、特に成人病予防により海藻成分の機能を中心としたものである。15章から成る。幾つかの章と小項目等の題名には次の様なものがある。褐藻に含まれるアルギン酸の血圧調節機能、フコステロールによる血圧調節、ラミニンと血圧、海藻の食物繊維、ノリに多いタウリンとコレステロールレベル、肝臓や血中のコレステロール低下、褐藻の有機型ヨウ素、クロロフィルとその部分分解物、ベタインの抗高コレステロール血漿作用、血液凝固防止と血液浄化、海藻のヘパリノイド、血糖値を低下させるテングサ類、海藻の駆虫効果、抗ガン性のある海藻成分、海藻のビタミン、

海藻の抗生物質、海藻のミネラル成分と有効性、海藻の紫外線吸収物質と皮膚の紫外線予防と美容、など。本書は一般向け啓蒙書として書かれたものであるが、薬理実験や疫学的調査資料に裏付けされているので、内容は十分に我々を満足させてくれる。ともすると難

解に成りがちな内容は平易な記述により理解しやすくなっている。日頃藻類を扱ってはいるが、研究領域の異なる筆者には新しい知見が多かった。家庭にも備えたいと思う本である。

(日本赤十字看護大学 千原光雄)

#### 西澤一俊著：のぎへんのほん 海藻と成人病予防

183頁。1993。研成社 1,300円

経済の高度成長のおかげで、今日の日本人は西欧的で満ち足りた生活を送ることが出来るようになった。食生活についてみても西欧化が進み、今では世界各地から集められた食物をたらふく食べられる、いわゆる「飽食の時代」を享受している。そしてその結果、中高年者だけでなく子供にまで成人病の徴候が現れている有り様である。現代日本と同様に成人病の悩みを抱える西欧では、近頃、成人病予防のために日本食が注目を集めているようである。古典的な日本食は、低カロリーである上にビタミン類や食物繊維に富むということで人気があるらしい。そうした日本食の中には、海藻を用いたものが少なくない。海藻には、ビタミン類や食物繊維に加えてミネラルも多く含まれているので、健康食品として高く評価されている。

本書は、健康食品として内外から注目を集めている海藻について、成人病予防という観点から書かれたもので、「のぎへんのほん」という啓蒙的なシリーズ本の一冊である。本書が刊行されて間もない、昨年10月29日に日本藻類学会秋季シンポジウムが東京大手町で開催され、そこでは機能性食品の中で最もポピュラーな海苔について、その機能性が多方面から検討され紹介された。その内容がかなり専門的であったのに比べると、本書の内容は一般向けにたいそうやさしく書かれていると言えよう。また、本書の内容は海苔に限っておらず、食品として利用されている海藻の成分と機

能を網羅したものである。

本書は、15の章とむすびの章で構成されている。第1章では、海藻、特に食用海藻について食べ方も含めて概説されている。第2章には、人間の寿命と病氣、3-10章には、成人病の予防や治療に海藻がどのように役立つかについて述べてある。これらの章では、最近増加してきた高血圧、動脈硬化、血栓形成といった循環器系の疾患、糖尿病、がん、便秘などの予防や治療に効果があると思われる海藻と有効成分について解説されている。11-14章は、海藻に含まれているビタミン、抗生物質、ミネラルとその有効性についての解説に当てられている。15章では、美容への海藻の利用が取り上げられており、最近問題になっている紫外線障害を防ぐのに役立つ可能性のある海藻の紫外線吸収物質も紹介されている。

もともと日本人は海藻を食べるのが好きな民族であるが、本書を読んだ後では、誰もがもっと海藻を食べようと思うに違いない。特に、高い会費を払ってエステチック・サロンに通っている女性や、お腹の出張り具合を気にしている中年男性などにお勧めの本だと思う。ただし、著者が村杉幸子女史と共著で出版した「海藻の本」(本書と同じ「のぎへんのほん」シリーズ)をすでにお読みの方は、同書との重複が気になるかも知れない。また、たいへん残念なのは、誤植・脱字が少なくないことである。もっとも、これは編集者の責任であろうが。(東京学芸大・生物 片山舒康)

**Bird, C. J. and McLachlan, J. L.: Seaweed Flora of the Maritimes. 1. Rhodophyta—The Red Algae**  
v+177 pp. including 65 plates, 1992. Biopress Ltd., The Orchard, Clanage Road, Bristol BS3 2JX, England (£39.50+£4p&p; Can\$90+\$9p&p; US\$75+\$8p&p)

世界で最もよく海藻を研究している大学または研究所は?の間に、カナダ大西洋岸の NRC Institute for

Marine Biosciences の名を挙げる人が多いと思う。形態分類、分子分類、分布、生態、培養、生理化学、遺伝等、広く各方面から海藻研究を行っている。著者等はそこで分類、分布の研究あるいは培養を行っている研究者である。アメリカ沿岸と違い、カナダ大西洋岸の海藻の分類や分布については纏まって記述した本が少なく、特に種類ごとに特徴を図示した書物は皆無

であったため、海藻に親しみ、そして研究することは、専門家以外には極めて不便であった。このことから、著者等は研究所のあるノヴァスコチア付近海域に普通に見られる海藻の同定用の本の作成を計画した。その第一巻が本書で、当核海域産紅藻約 128 種のうち、代表種 73 種を扱っている。それぞれの種について、見開きの左ページに解説と写真の説明が、右ページに藻体の全形写真及び種の特徴を示す顕微鏡写真図が掲載されている。図は 65 プレートあり、黑白写真であるが、よく種の特徴を示している。筆者はかつてノヴァスコチアに滞在の折りに海藻採集を試み、種名を知るのに

苦勞したが、今回本書によりずいぶん知識を補うことが出来た。大西洋沿岸の海藻であるので、種類の大部分は我が国と異なるが、属はほとんど共通で、従って我が国の海藻をより良く理解するには良い参考書となるであろう。種の解説の他に、紅藻の特徴、掲載種の分類リスト、属の検索表、用語解説が添えられる。第二巻は褐藻、続いて緑藻の刊行予定の由である。なお、掲載種の標本は Herbarium of National Research Council (NRCC) に保管される。

(日本赤十字看護大学 千原光雄)

